

環境と比較すると、どうしても狭く、単純で、変化が少ないものになってしまう。こうした飼育環境に工夫を加えて、環境(environmental)を豊かで充実(enrich)したものにしてという「環境エンリッチメント」という考えも提唱されている。

こうした変化に対して、多くの動物園では環境教育や種の保存などの活動をアピールしたり、自然の中にいるような飼い方をするなど、より魅力的な展示方法を模索したりしており、旭山動物園では、行動展示や能力展示など、感動を与える展示をめざしているのである。

さて、世界中の動物園には、娯楽や人間性の回復といった「リクリエーション」、繁殖や動物行動学などの「研究」といった役割に加え、生命や環境といった「教育」面での役割も期待されており、こうした役割を果たさなければもはや動物園とは言えない。さらに、地域の野生動物に責任を持つという「自然保護」という4つ目の役割もあり、現代の動物園はこのことを軽視することもできない。

こうした役割を果たすための活動例としては、鳥インフルエンザやSARS（重症急性呼吸器症候群、Severe Acute Respiratory Syndrome）といった人と動物の感染症研究がそれにあたるし、細胞保存や人工授精などによって動物を絶滅させないための努力もそうである。また、北海道の動物園が共同で行っている動物の野生復帰や自然保護も、動物園としての役割を果たすための活動の一環である。

さらに、先にも述べた「リクリエーション」という言葉には「娯楽」と「人間性の回復」という二つの意味があるが、動物と一緒に居て幸せだと感じる人は動物を守る人になり得るための、野生動物保護の原点と言えるのではないか。旭山動物園のスタッフは、「旭山動物園が野生動物を守り、地球を救う」という気概を持っている。こんなことを言う人笑う人いるのだが、これだけの自信を持って仕事をするということが重要なのである。

最後に、冬の旭山動物園の見どころを紹介したい。

第一は、旭川の冬が最もよく似合うホッキョ

クグマである。ホッキョクグマは冬が一番美しく、そして格好良く見える。また、ホッキョクグマはよく遊ぶ。雪などで体を冷すことのできる冬は、暴れるように遊ぶ。遊んでいる動物がいるということは、その動物がそこそこよい環境にいるということもできる。このように、雪のある動物園にしかできないこともあり、地域性あふれる展示を心がけている。

第2はアザラシである。自然下では、空中にはカモメの仲間が必ずいるし、水中には魚もいる。このように一緒にいて、ともに生きていることに意味がある。また、展示館のチューブをアザラシが通る様子はマスコミ報道などでご存じのことと思うが、アザラシは自分の意志でこのチューブの中に入って行き、自由自在にUターンする。さらに、この中に3頭一緒に入ることもあり、こうした様子はまるで軟体動物のようで、とても骨があるとは思えないのだが、これこそ生きているということである。さらに、アザラシは雪があると手足も使わず斜面を登っていくし、動物舎を出てお客様の方にまで遊びにも行く。

旭山動物園は日本一北に位置し、当然冬は厳しい。だが、旭山動物園が最も輝くのは冬である。真っ青な空に雪が輝き、動物たちも生き生きとする、どこにもない冬である。

有名になったペンギン・パレードもとても美しい光景だし、ペンギンのトボガン（腹這いになって滑っていく行動）を見られるのも旭山動物園だけである。

最後に一言。

動物園 行ってみるなら 冬の旭山

【略歴】

1948年、北海道札幌生まれ。北海道大学獣医学部卒業。1973年、獣医師として旭川市旭山動物園に就職。飼育係長、副園長を経て、1995年から同園園長を務める。

日本動物園水族館協会副会長など各要職を兼任。

著書に「命のメッセージ」（竹書房）ほか。